



水産学部長に就任して

水産学部長

中 田 英 昭

このたび4月1日付けで水産学部長を拝命いたしました。法人化という大きな転機をむかえ、大学の社会におけるあり方や水産学部教育・研究機関としての存在意義が、従来に増して厳しく問われる中、あらためて責任の重さを痛感しています。

東シナ海は世界有数の漁場として知られ高い生物生産力を誇ってきましたが、近年は環境の荒廃とも相まって漁業資源の減少が深刻な問題となっています。一方、ノリ不作などを契機とした最近の「有明海異変」を例に挙げるまでもなく、西日本沿岸の漁場環境の変貌や漁業の衰退は社会的に大きな問題を引き起こしています。海の生物資源は、将来にわたって人類への食糧供給に大きな役割を担っていますが、一方で上記のように水産業界は衰退し、資源を支える基盤となる沿岸域の環境悪化が急速に進んでいます。そうした現実の上に立って、海の生物生産と食糧供給を安全かつ安定したものにするための総合的な取り組みを進めることは、これからの最重要の課題の一つといえます。従来の水産学の枠組みだけではこうした課題の解決は難しく、学際的な研究・教育の新しい枠組みを作り出していく必要があります。水産県長崎に立地する大学の水産学部として、学部内はもとより他の学部や生産科学研究科等とも積極的に連携していくことがその意味で非常に重要と考えています。

上記の観点から、また長崎大学の中期目標で重点的に取り組む領域の一つに掲げられている「東シナ海域及びその周辺域をフィールドとした海洋環境保全・修復や水産資源育成に関する研究」を推進するためにも、その拠点として学部附属海洋資源教育研究センターの学内共同研究施設への改組拡充を検討

しているところです。昨年8月には独立行政法人西海区水産研究所がセンターの隣に移転し、長崎県総合水産試験場とあわせて3つの水産・海洋に関する研究機関が同じ場所に集結するという全国でも例がない新たな状況が生まれました。このような地の利を最大限に生かし、センターが中心となって「水産学部の練習船を活用した全学レベルでの海洋フィールド教育・研究」や「東アジア沿岸諸国との水産・海洋関連の国際共同研究」を推進していきたいと考えています。中国・韓国の大学等との学術交流協定を基盤に東アジア地域のネットワークづくりを進め、人材育成や研究交流を通して海の環境や資源の保全・回復に貢献していくことは、必ずや「本学の地理的な特性に基づく特色ある研究」の一翼を担うものとなることでしょう。センターの改組拡充といった新たな体制への移行に伴い、学内の他の部局の皆様にも今後いろいろとご協力をお願いすることになると存じますが、どうぞよろしくお願いします。

私の専門分野は水産海洋学で、とくに海の環境と生物資源の変動との関係に関する問題に取り組んできました。これまで海の研究を続けてきて強く感じるのは、陸から沿岸の海、そして外洋へとつながる連続性のようなものの大切さです。海の環境や資源を守ることは、海の現場だけを見ていてもできません。森から海へとつながる水の流れとそこに生息する生物が織りなす自然の生命の循環の仕組み全体に目を向けることが必要であり、そのためには広範なさまざまな分野の方々との連携が不可欠です。「潮の香りと、人の香りのするネットワークづくり」を目標にしながら、これからも研究と教育、学部や大学の運営に尽力したいと思っています。